

山梨学院大学での十数年（政治行政学科創立二十周年記念号）

著者名(日)	我部 政男
雑誌名	山梨学院大学法学論集
巻	68
ページ	17-26
発行年	2011-11-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1188/00000528/

山梨学院大学での十数年

我 部 政 男（山梨学院大学名誉教授）

わたしが山梨学院大学（以下、本学）で過ごしたのは、正確には十七年間で、二十年には三年は足りないことになる。しかし、この十数年間はわたしにとり少し大げさだが、ひろい意味で豊饒の時代と称することができそうである。

まずは政治行政学科が二十年の節目を迎えられる記念すべき年とともに祝い喜びを分かち合いたいと思う。

名誉教授の規定を満たす在職期間には満たない。それを承知で本学の理事会は、わたしを推薦しかつ承認してくれた。この特別の配慮にわたしは、もちろん深く感謝している。この機会に、古屋忠彦学長、三神廣俊学長補佐に心からのお礼を申し上げたい。

本学の法学部教授会は、わたしの定年退職（二〇〇八年）に際して、紀要で記念号を編んでくれた。これらのご厚意に対してこの場をお借りして、時の上條醇法学部長、全教授会メンバーに対し心からのお礼を申し上げたい。わたしの手元にその『法学論集』（二〇〇九年、六三号）がある。その中で、本学の江藤俊昭教授は、わたしを紹介する文章を寄せている。これほどありがたい話はない。わたしに関する情報量も多いし、その記述の中にはすでにわたし自身失念したこと等もあり、思い出すと懐かしい。

いま、ようやく定年の年を迎え、教壇での教職生活を終えたことになる。静かな年金生活者となってみると、起伏に満ちた教職生活がとても不思議に思えるし、またある感慨を禁じえない。

本学の政治行政学科関係の二十年の記念すべき時期を迎えるに際し、わたしはその時空の中に漂う自己の志向した調査・収集・出版の相互の連鎖の一こまを明らかにしてみたい。すなわち、その間に何をしてきたかということである。研究活動以外の教育活動、学生指導等はどうだったのかと聞かれれば、これといって自信のある返事はない。客観的な評価を引き出すということになると、わたしの講義を聴き、ゼミに参加してくれた個々の学生の声や言葉に耳を傾けるしかないであろう。在職中お付き合いいただいた先生方、職員及び学生の諸君に心よりの感謝と敬意を表したい。

わたしが本学に赴任したのは、法学部に行政（政治行政）学科が増設された一九九一（平成三）年の十月のころにさかのぼる。まさに二十年も前の物語である。当時は、新設の学科の掲げる目標と実際に入学してくる学生との間にある断層があった。公務員、行政職へ就職先を広げるといふ強い参入を目指す学科の指標があった。しかし、一方には公務員試験への合格者の割合が少なく、目標と現実の間には、歴然と拮抗するという厳しい構図があった。めざす就職市場の開拓と学問分野をどう結びつけて調整を図るかが課題であり、直面する現実であった。

これまで山梨県は、わたしの経験では未知の世界であった。実際に、学科の全陣容も整い、わたしが赴任するのは、正式な学科開設の四月より半年も遅れの十月であった。「遅れてきた青年」ならぬ中年の新しい土地での生活は、すべてに気を使う緊張の連続であった。疲労は確実に蓄積されたことは言うまでもない。

わたしが前にいたのは、国立の琉球大学である。その南の島は、富士山を持つ山梨県とは、いささか離れた地域

にあり、その間隔を一気に埋めてくれたのは、今は亡き慶応大学教授の内山秀夫氏のはからいであつた。このことが本学で働くことのできた第一の動機であり、忘れてはならない記念すべきことである。

学会出席の折々には、東京で活躍する学者・研究者・ジャーナリスト・評論家といろいろな方に紹介してもらつた。その内山教授から、次の上京の機会を知らせてくれたとの電話があり、会わせたい人がいるからと話された。その時お会いし紹介されたのが、河中二講教授であつた。これ以後の風向きは、不思議と甲府に向く、あたかも台風の眼がそこにいすわるかのように。

ちようどそのころ河中教授を中心に本学に政治・行政学科創設の構想が持ち上がり、科目担当の人選へと進行しつつあつた時期に当たる。わたしの知る正確な情報は極めて少ないのだが、この「崇高で遠大な計画」に参加しなさいというのが、両教授の意見であり意向であつたのではなからうか。初めての面談の場所は、三田の慶応大学の研究室で、次に正門前の喫茶店、それから清酒を揃えた店へ三段跳びで移動した。書類作成のための用紙（履歴書、業績一覧）が渡された。おそらく内山教授より強い推薦の意志が、河中二講教授のもとに伝えられたこととわたしには推察される。はつきりしたことは分からないが、河中、内山両教授の信頼関係は、内田満教授、武者小路公秀教授等の有斐閣の『現代政治学の基礎知識』共同編集の過程で醸成されたのではなからうか。これは今にして思うことであるが、「河中構想」には、ある経営哲学が秘められていた。その一つが、大学院（修士課程）設置との関連で人事を進めることであり、もう一つは、学閥の弊害を最小限度に押し込めるために、一大学からの採用人員の枠を二人に限定していることである。これは、もちろん原則であり、「余人をもつて代え難い」優秀な人物の場合には、配慮の余地はあつた筈である。理想的には、個々の大学のすばらしい側面を具現化した人物がバランスよく集

結し、本学の地で満開に開花することが望ましいとの発想である。

ところが、予想は的中する。そう念じつつ周到に準備した河中教授の着想は、現実のものとなり、個性豊かな研究者集団が形成されることになる。こうして描いた理想は、現実のキャンパスに移植された。

しばらく時間が過ぎて、今度は、新宿のヒルトンホテルのロビーで、古屋忠彦学長等との面談で、最終のつめの品定めが行われたのであろうか。人事は、慎重の上にもまた慎重であった。

ほぼ書類の最終審査も通過し、学科開設の準備も見通しも整いつつあった。

人事のことは、一応は、秘密であり、同時に公開性を持つ厄介な側面を伴う。

そのころ勤め先の琉球大学の政治学関係では、天児慧教授と増田弘教授の二人が、東京地方への移動を決めていた。他の人の移動に関心や話題が集中していると、今度は本学の椎名慎太郎教授から、「割愛依頼」の文書を持って琉球大学の宮城健学長に面会したいとの連絡を受けた。時期は切迫しつつあった。

わたしの移動情報は、固く秘密にされ、わたしから公にすることはなかった。ところが、学科創設の書類審査を担当された慶応大学の松本三郎教授から、琉球大学の政治学研究室にいた弟（政明）の方に電話があったという。連絡の一つは、国際政治学会の理事長選挙の投票で、学会費未納者が投票をすませたのがなん名かおり、その一人に「あにき」がいるので、早めに会費を納めるようにと。あまり名誉な話ではない。あとの一つは、「あにき」は、書類上だけでなく、本当に山梨に移るのかと問い合わせがあったという。確認のための電話であつたらうが、そのことが、期せずして、すべてを水面下から浮上させる結果になった。ちなみに松本教授は、弟の大学院での指導教授である。元来は、学部・学科の創設に関わる審議委員に誰が就任するかも公表されることはないのである。しか

し、内密に知っている人もいる不思議な闇の世界である。

かくして、このことが幸いしてか、事態は急展開を遂げることになる。時限付きの秘密事項を解除し、事務手続きを進めねばならない時期に来ていた。

それ以後十七年間、本学に勤め働いたことになる。前任校の琉球大学での二十年を加えると、三十七年の「教師体験」の歲月ということになる。

新設の行政学科の教授陣は本学の要職を独占しているかの勢いがあった。

因みに一瞥すると、法学部長は河中二講教授、図書館長は神田修教授、行政研究センター長は立田清士教授、社会科学研究所長は小山博也教授、生涯学習センター長は宮坂広作教授、大学院公共政策研究科科長は佐藤竺教授、となっており、文字通りの大物の実力者の布陣である。

行政学科創設期には法学科から椎名慎太郎教授、山内幸雄助教授が移籍されており、新規の採用は江口清三郎助教授、中井道夫助教授、広瀬佳一講師、江藤俊昭講師、日高昭夫講師、丸山正次講師、栗栖聡講師等の学会の前線を担う人材でかためられていた。その後にくらかの人事の移動があるがその詳細はここでは省略することにする。わたしは専門分野の近いこともあって、埼玉大学を定年後に移ってこられた日本政治史の小山博也教授からは、実に多くのことを学ばせていただいた。岡義武教授の学風をくむ小山教授は、冷静さと渋い深みのある穏やかさで若い研究者ともお付き合いされた。わたしが数年前、東大での国内研修でお世話になった三谷太一郎教授との近い関係が、親密さをさらに深めた。人の輪の広がりや深まりを実感させてくれた。

研究室の配置構図は、今の図書館前の新十二号館で、二十年間あまり変化はない。はじめ教授には、個室が与えられた。それ以外の若い研究者の助教授・講師には二人で一室を共有していた。研究意欲の旺盛な若い研究者にこそ個室は必要であつたろうと想像される。その後、一人一室主義は、徐々に実施されて、いまや完全に独立した研究室を有するにいたっている。

赴任してきて間もない直後は、本学に移つて来たことが、悩みにもなつた。正直なところ職場を変わらなければならほどの必然性や理由が、わたしに本当にあるのかどうか。移らないで前の職場にじつといた方がよかったのではと考えたことも事実あつた。ところが退却は、許されるはずもない。にもかかわらず、はつきりしない反省、後悔の心理が心の中をうごめいた。

しかし、時間の推移と慣れは、不思議なもので、自然と人の心をも変える。周辺にも多くの魅力的な人のいることにも気づいてきた。本学の環境では仕事のできそうな手ごたえが感じられてきた。出版すべき学術的な本のリストが頭の中に閃きはじめてきたのもそのころだ。出版社の協力者も増えるし、支援の手を差しのべる知人も膨らんでいった。東京で出版活動を通して自己脱皮を図りたいという希望と野心を心に描いた「沖縄離脱」の考えは、確実な方向性を目指し始めたのであろうか。

一九九五年（平成七）には、本学に大学院公共政策研究科（研究科長・佐藤竺）が創設され、他の教授と同様わたしも、そこを兼任することになる。他に法学部から込山芳行教授が、経営情報学部から山岡熙子教授が兼任された。

学部でわたしは、政治学、地域政治、地域政治論、日本政治外交史、専門演習等を担当した。初めの頃は、小山博也教授が日本政治史を担当していたが、小山教授の定年後は、わたしがその科目も担当することになった。大学院では、日本政治外交史、演習を担当した。

近代日本政治史に特別の関心を持っていたわたしは、地域としての沖縄に視点を定めて研究を深めていた。研究対象の多くは、その分野にまたがっている。この地域や地方の研究は、近代日本国家の特質を解明し照射するに必要であるにもかかわらず、研究者の眼が向けられず、永く空白のままの時間が過ぎてきた。このこと反省もあって、わたしの関心も沖縄を地理的に離れても逆に追求の態度は、揺るがぬ姿勢へと固まっていたのであろうと推察している。

わたしは、先の近代沖縄のように個別具体的な課題にも関心を示したが、一方では、基本的な資料の調査・収集に関心を持っていたし、もし可能ならば、これら日本近代史の重要な基本史料が刊行されることを切に希望していた。

琉球大学の二十年間の在職中に関係者と協力し、近代日本、沖縄の関係史料を収集した。その史料名及び所蔵機関名を明記した目録を作成した。わたしの史料学の集大成のつもりで一九九七（平成九）年、本学の『社会科学研究』（二一〇号）に発表した。

学術的な論文と史料とは、一律に評価できない性格を持つことは言うまでもない。人により両者の評価にも大きな差がある。もちろんそのことは当然なことであり、異常なことではない。時に史料は、論文以上に注目され評

価を高める場合もあるが、概して、史料を低く看做す研究者も結構いるものだ。その傾向の強い研究者は、自らの史料の公開を拒む。

とは言うもののわたしの関係したものに、注目を集めた史料集もなかにはある。例えば、そのような評価の対象になったものに『地方巡察使復命書』（上巻、下巻二冊）、『自由民権機密探偵史料集』、全九巻の『明治建白書集成』等がある。それら建白書の史料集の編纂には、わたしの尊敬する日本近代史家色川大吉教授も参加された。本学で出版した『天津事件関係史料集』（上、下）の二冊もその流をくむものである。

国際的な学術交流の分野では、中国の義和団事件、日露戦争関係の写真資料も多く収集した。その一部は、中国第一歴史档案馆に寄贈した。

沖繩戦の研究史料にも関心を持って集めたものがある。防衛省防衛研究所沖繩戦関係文書の刊行、ワシントンのナショナルアーカイブ所蔵の沖繩戦写真史料の調査・収集も精力的に行なった。しかし、時間と費用に圧迫され継続することが不可能となり途中で終わった。しかし、悔いることもない。後は、関心のある人がやればいい。

学会での活躍については何かあるかと、問われれば、記録しておくほどのものはないと答えたい。日本政治学会と日本国際政治学会の会員として登録していたが、定年を機会に脱会届を提出した。かつて政治学会年報に二点の論文を掲載したくらいか。また国際政治学会の『国際政治―国際政治のなかの沖繩』の編集を担当したことは報告できよう。学会の主流からは大きくはずれた地点にひっそりとどまっていた。

本学に研究の拠点を移したお蔭で、この十七年間に他大学との交流も増えた。依頼され実施した非常勤をつとめた大学は、立教大、法政大、慶應義塾大、日本女子大（院）、早稲田大学（院）、東京女子大（院）である。図書館

を利用させてもらったことが喜びであった。講義内容は、沖縄近代史が中心であった。それがまた希望事項でもあった。

この間の国際交流、国際会議、海外調査にも少し記録しておくことがある。

法政大学沖縄文化研究所の研究調査団と一緒に東南アジアのインドネシアを同行することを許された。ネパールの山岳農村の見学調査にも参加した。

中国との交流では熊達雲教授の協力と援助に負うところが大きい。北京大学、語言文化大学、復旦大学、南開大学、西安交通大学、瀋陽体育大学、中国第一歴史档案館の機関との交流ができたのも熊教授の精力的な助力があったのである。その場で交わされた言葉や名所旧跡の映像が鮮明に心に残る。

一方ロシアとの交流を支えてくれたのは、コンスタンチン・サルキソフ教授である。サルキソフ教授にめぐり合う機会がなければ、ロシアの社会を広く理解することはできなかったであろう。広い国土と歴史を持つロシアへの理解を深めるには、なお多くの時間が必要であろう。サルキソフ教授の案内で、樺太のユジノサリンスク大学、ウラジオストクの極東大学、モスクワ大学、サンクトペテルブルグ大学の日本研究者とも交流の窓を開き協定書を結ぶことができた。わたし自身かの文豪トルストイを生んだロシア大地に大きな親しみを感じることができた。サルキソフ教授の尽力で日本学者ネフスキーの関係者を探し出し、本学に留学させることができた。世紀の文化事業であり交流であるとわたしは理解している。

一〇〇年前の日露戦争をテーマに国際会議を開催したが、学術の進展に大きく寄与した気がする。

本学に政治行政学科が創設された。この絶好の機会に便乗して、わたしは甲府に来ることができ、本学で幅広く

活動する人々の出会いの中で時も与えられた。その場にいるということ、僥倖にめぐり合うことになった。本校でのふれあいと邂逅をわたしの人生における豊饒時期と考えている。最後に、本学のますますの発展を祈念してやまない。